

Saiki
Style

さいきじまん

生まれ持った熱い志は、ふるさとが授けてくれたもの。

ここに暮らし、それぞれの道で生きる人々が抱く想いは皆同じ。

かけがえのないふるさとへの愛情であふれている。

佐伯の歴史と風土が育んできた糴の力を
日本や世界へ伝える日々です。

糴屋本店9代目

浅利妙峰さん

快活な振る舞いとあふれるパワーで、糴の魅力を日本や海外へ伝えている浅利さん。元禄2年(1689年)から320余年続く老舗「糴屋本店」で“こうじ屋ウーマン”と自らを称し、精力的に活動しています。

もともと浅利家のルーツは四国にあり、毛利氏の庇護で佐伯との縁ができたといいます。豊後佐伯藩の船頭衆の頭として毛利公に仕えていた吉左衛門信義が、当時四国で醸造業が栄えていたことから、糴造りを始めたのが、糴屋本店の佐伯での始まりです。その時佐伯には数軒の糴屋があり、酢や醤油、味噌は家庭で作るのが当たり前。しかし時代は変わり、ちまたには添加物や保存料を使った調味料が出回るようになりました。そんな中、自身の子育ての経験もふまえ、レシピ考案や講演会を通じて発酵食品のもととなる糴の力を提唱。「時代に合わせた使い方を」と手早くできる料理の提案に力を入れています。

8代目の長女として生まれた浅利さんは、幼い頃から職人と家族のように接し、糴のできを肌で感じて覚えていきました。甘酒は高血圧予防、味噌は長寿の効能など、書物を通じて研究を重ねるのも常。この背景にあるのは、第8代佐伯藩主・毛利高標公の「とっさの機転は学問にあり」という教え。そこに「己を深め、他を利する熱き心を読書で磨け」と言葉を加え、経験や書を通じて身につけた知識を大切にしています。また佐伯の魅力は人にもあるといい「毛利氏の時代が長かったことや海の交易が盛んだった地勢もあり、穏やかで気さくな気質です」と笑顔。これからも、佐伯の風土と長き歴史、そしておらかな人が紡いできた糴の文化を、より多くの人へと語り継いでいきます。



海外でも糴に関する講演会やレシピの公開、レストランのオーナーと協力して料理を作ってもらうなどのPR活動をする浅利さん。



穏やかで美しい
佐伯の海を多くの人へ広げていきたい。

佐伯セーリングクラブ会長 西山隆さん

日に焼けた肌とマリンス룩の装い。太陽を浴びてキラキラと輝く佐伯の海がよく似合う西山さんは、海をこよなく愛する少年のような心を持つ男性です。「佐伯の海は、きれいで波が穏やか。ヨットやマリンスポーツに最適なので、安全に楽しめる海の遊びを多くの人に伝えたい」と頬を緩ませます。そんな思いから「佐伯セーリングクラブ」を立ち上げたのは、26歳の時。現在に至るまで40年間会長を務め続け、子どもから大人まで幅広い世代に海の魅力を伝えてきました。

西山さんが主にヨットを浮かべるのは、西上浦^{かざなし}の風無漁港。山々に囲まれ、その名のとおり風の影響が少なく、内海で深さもありヨットに適した環境が整っているためです。現在セーリングクラブの会員は20名以上。海が夕陽に紅く染まる様子を目の前にするサンセット

クルーズや、時には仲間とワインパーティーを開くなど、さまざまな形でヨットの魅力を伝えながら、ご自身も海との暮らしを楽しんでいます。また佐伯海洋少年団の指導部長も兼任しており、子どもたちへロープの結び方や手旗信号、ボートの漕ぎ方といった幅広い海のイロハを教育。「海の上では自然を相手にするので、危機管理が大切。自分の命に関する想像力をはたらかせることは、生きるうえで欠かせないことです」と子どもたちの“生きる力”を育てています。

ほかにも魚市場でのイベントや進水式の企画、地域全体で防災意識を高める試みなど、西山さんの海や自然に関する活動は尽きることはありません。どこまでも広がる佐伯の海のように、西山さんの多岐にわたる活動はまだまだ続いていきます。



風にはためく帆が青空に映える、ヨットの回遊風景。佐伯海洋少年団の活動では、子どもたちの輝く笑顔を見るのも楽しみのひとつ。



人も自然も豊かな最高の場所で
地域の輪を紡いでいます。

青山女性百人会代表 本田房代さん

暖簾の奥から楽しそうな笑い声が響き渡る「青山ピンコロ軒」は、“ピンピン元気でコロコロ笑って過ごそう”という思いから名付けられた店。地域の高齢者のコミュニケーションの場として平成20年、佐伯市の茶の間事業の一環でつくられた場所です。本田さんは、この「青山ピンコロ軒」を切り盛りする青山女性百人会の代表。生まれも育ちも佐伯市青山地区で、「空気が澄み、住んでいる人も素晴らしい。野菜もおいしくて最高の場所です」と青山地区への愛情を胸に地域を盛り上げます。

店内では漬け物や菓子類などを販売しており、なかでも地元で採れる“さるかけ”の葉と、青山地区の米粉を使って手作りする昔ながらの饅頭は自慢の味。山に葉を摘みに行き、餡もすべて手作りするなど、女性たちが手回しまかけて作っています。「お饅頭とお茶を

味わいながら、みんな世間話を楽しんでいます。働く人も、ここに来ると元気になると言ってくれますね」と笑う本田さん。働く仲間と冗談を言い合い、訪れる人々にも元気のよい挨拶や会話を絶やさず、太陽のような存在でみんなを明るく照らします。

青山地区の横のつながりの基盤となっている「青山ピンコロ軒」ですが、今後は「縦のつながりも上げられる場所に」と考えている本田さん。これまで働いていた60～80代に加えて30代という若いパワーも仲間として迎え、一人暮らしのお年寄りへの食事の宅配事業など、さらに活動の枠を広げています。また忙しい合間を縫って、どろんこバレーの主催や女性消防団での活動など、地域のための取り組みにも挑戦。持ち前の明るさとパワフルさ、そして笑顔で青山地区を元気にしています。



「青山ピンコロ軒」は、月・水・金曜日の10時～15時までの営業。防災訓練を目的とした炊き出しの練習なども行っています。